

造船工場 海連

島の
図鑑
仕事
2

広島県 大崎上島

絵 大崎海星高校ちべ子

造船 01

菅忠俊

鉄工所でできることは無限大

「鉄工所の職人」

鉄板の切断、溶接、組み立て、鉄工所の仕事の中で「できることは何でもする」と言う忠俊さん。造船の他にも、公共工事、土木建設などの依頼もあるという。自分で驚いたのは「ピザ釜の扉」だそうだ。忠俊さんの仕事はネジを通してために1ミリのズレも許されない繊細さが求められる。寸法通りに切ることは船の構造物をつくる上で大切な技術。夏場の鉄板の上は目玉焼きができる程厳しい熱さに。自然と体力がつきトレーニング要らずなのは、この仕事の良いところかもしれないと思う。週末は島から出て、ビリヤードやウインドウショッピング。でも、ついつい気になってしまいるのは、フェリーに乗っているときにパイプの太さや、溶接が上手いかどうか。街を歩いていても忠俊さんの眼はいつも輝いている。

切断から溶接、組み立てまで

頼られてできることは何でもする



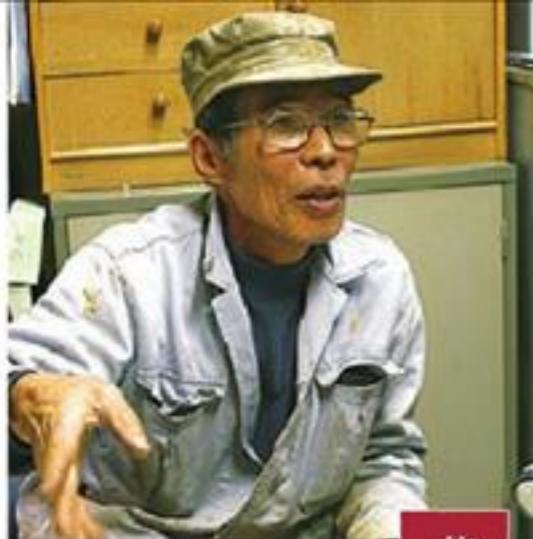
若手を見守る匠

takumi

菅 敬助

職人としてのこだわりは「正確さとスピード」。それは必ずしも学歴や資格が全てではない。良い製品をつくるために誰よりも努力を欠かしてはならない。寸分の狂いもなくつくり上げ、どこに納品しても「ちゃんとしてくれている」と言つてもらえる。当たり前のことがきつちできる、それが職人だと語る。

実は女性にもピッタリの仕事



お客様とは20～30年来の長い付き合いになる。精度は高く、工期は確実に守るということが一番大切。仕事のこだわりは、何よりも「相手に信頼されるものをつくる」こと。丁寧な仕事を続いているからこそ、良いものをつくることができる。それが、お客様に信頼され、長く繋がることができると語る。

若手を見守る匠

元樋修宣

時間が経つのが早いと感じる時は丁寧な仕事をした証

島の仕事図鑑

2

広島県 大崎上島

造船

02

元樋泰次郎

船は世界最大の動く建造物
船のパーツならどこでもつくれる

高校、大学と島外へ進学。そして卒業と同時にUターンし、創業90年を迎える家業に就いた。仕事の楽しさはものづくりにあると考えていた泰次郎さん。家業に就いたことは自然な流れだったと笑顔で言う。一つ一つの製品をつくりしていく中で、作業に集中し、没頭することができる時間はとにかく気持ちが良い。経験を積んでいくと、今まででは分からなかつたことも、1人で正しい判断ができるようになり、それがやりがいになる。時には失敗することもあるが、その失敗した時間をいち早く取り戻し、最小限に抑えるのが重要なと言え。泰次郎さんは昔から海が大好き。趣味は魚釣り。目の前に広がる海。そこを大型船がさっそく走る姿は島のオススメの景色だと語る。



休日は4人の子どもと遊んで楽しむ
お気に入りの道具は道具



造船 03

岸野花香

海に関わる仕事+ものづくり=造船!



お気に入りの工具はラチェット

進水式で初めて船に乗った時の感動は一生忘れない

若手を見守る丘

塩田範仁

船が大好きという範仁さん。きっかけは父親が船乗りだったからだと言う。全国でも珍しい造船科のあつた旧木江工業高等学校造船科（現大崎海星高等学校）で学び、現在は工場長を務める。船づくりは、鉄の切断から始まり、曲げて、つなげてブロックをつくり、エンジンを付けるなど、何十何百の工程を経て完成する。そこで追い求める理想の「良い船」は、

造船の魅力は何と言ってもスケールの大きさ。鉄の塊で出来た大きな船が海に浮かぶ迫力はこの仕事でしか味わうことは出来ない語る花香さん。普段は工務部で図面の整理、ブロックの検査、書類の作成など何でもこなす。夏場の鉄板は焼けるほど熱く、体力的には厳しい世界。それでも、多くの人たちと協力しながら船をつくりあげることが、自分にとっての最高のやりがい。造船業界の専門知識がない自分を雇ってくれたことも仕事の励みになっている。新造船を初めて水に触れさせる「進水式」。誰でも見学ができるので、是非多くの人に参加してもらいたいと、この業界の魅力を笑顔で話す。



若手を見守る丘

takumi

塩田範仁

振動、騒音が少ない船だと言う。そのためには、たとえ同じ図面でも同じ物はつくれない。前回よりも良いものをつくる。それが「ものづくり」だという。失敗や悩みも全ては良い経験。そこから何を学び、次にどう活かすかを常に考えることが大切と語る。

島の仕事図鑑

2

広島県 大崎上島

造船

04

岡田顕正

効率よりも安全を重視

心配りが造船を締め括る

顕正さんの仕事は、造船所が扱う船の操船。新しくつくった船を初めて水に触れさせる進水式の際の操船や、完成した船を引き渡す時の操船など、その仕事には特別な緊張感があると言う。大切な船にキズをつけずに届けるためには、細やかな心配りが必要である。この仕事で大切なことは、何をする時も注意を配り事故をなくすこと。ケガをして

得する人はいない。「安全」が一番と強く語る。顕正さんは、小さい頃から船と海が近くにある環境で育ち、自然と造船業界に魅せられていたと言う。好きというよりは、船と海が生活の一部になっていたと振り返る。そんな身近な場所であるからこそ、これから造船業界が今以上に盛り上がり、まわりの人々の生活により身近な、活気のある場になるよう奮闘している。



分厚い鉄を曲げて丸くするのは造船の誇れる技術
船にはすばらしい技術が詰まっている

海運 05

末田晃史

日本の物流の50%を支える海運

医薬品等の基礎原料を運ぶケミカルタンカーの運航管理の仕事をする晃史さん。日本の物流の50%は海運であり、ケミカルタンカーは積荷の中でも、温度管理や品質管理などが最も難しいと言われている。晃史さんは、船を安全に動かすため、船員さんの支援、船の修理、部品供給などはもちろん、長期で家をあける船員さんのご家族のケアまで行う。安全な運航のために出来ることは全てやるのがこの仕事。そして、これから時代は安全であることはもちろん「環境にやさしい」ことが業界で生き残るための一つの条件になると。従来の船よりCO₂を30%削減したエコシップを3隻導入している。内航船タンカー業界をもつとメジャーな業界にするため、同業者との協業等による組織化に挑戦していると語る。

安全管理の資料作成は陸での大切な仕事

何も起こらないことが一番の引き算商売



海運 06

川本洋彰

地域の人の大切なインフラ だからこそ「安全」が第一



正確な時間がかかる電波時計は仕事に欠かせない
船乗りは一生ものの仕事

子どもの頃から船と海が好きだった洋彰さん。昔は段ボールでフェリーをつくり、オリジナルのフェリーにミニカーを積んで遊んでいたと言う。祖父の代から続くこの仕事を継ぎ、島の大切な足となるフェリーの運行に携わっている。フェリーは船長、機関長、甲板員の3人体制で運航し、船上での出来事はこの3人で全て対応しなければいけない。一人一人が役割をしっかりと果たさなければ、お客様を安全に送り届けることは出来ないと言う。時には強風や濃霧でフェリーを止めなくてはならないこともある。大切な島の足だからこそ最善を尽くし、安全のために「プロだからこそ船を止めている」と説明してくれた。現在は甲板員を務め「今後は、船長を目指して試験を受けていく」と次なる目標を力強く語った。

造船 07

佐々木 悠

ヒトとヒトとのつながりが より良い船を産むチカラ

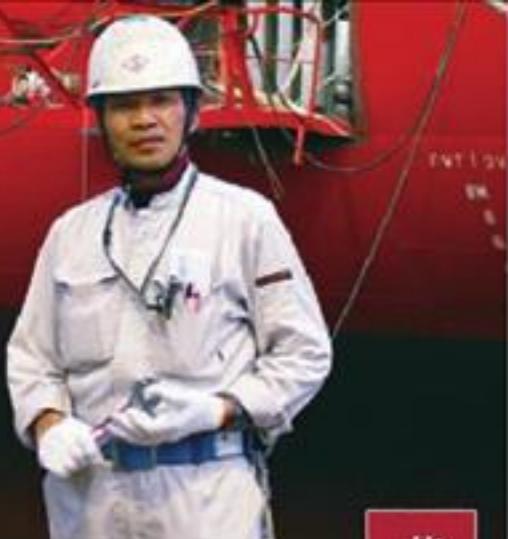


みんなが楽しく働けるよう
ものづくりで大切な環境をつくりあげる

若手を見守る丘

玉田 恭二

恭二さんの主な仕事は、造船の総合工程表の作成。お客様に引き渡す船に、不備が一つもないようにするため、その管理には気を遣うと言う。会社ではLPGやケミカルを運ぶタンカーをつくっているが、船をお客様に引き渡す前の1ヶ月間が最も多忙になる。現場では、鉄板を切断する際に火花でスレンレスがさびないようにすることが大変だと言う。休日で



ものづくりで大切な環境をつくりあげる

大学を卒業後、4年にわたり東京の保険関係の会社へ勤務。次第にものづくりに携わりたいという想いが募り、家業の造船会社へのUターンを決意。現在は、主に総務、経理・財務、人事を担当、業務の質と効率の向上を常に念頭に置いている。悠さんは、これまで本格的に取り組んだことのなかった新卒採用を一から企画し実行する。初めての合同企業説明会では、学生が5名程しか集まらず失敗。しかし、そこから悠さんは粘る。工夫に工夫を重ね、今では150名を超える学生が集まってくれるようになった。従業員は協力会社の方を含めると200名を超える。より良いものを産み出すにはコミュニケーションが重要。親睦を深めるための企画も欠かさない。各自の仕事に誇りを持ち、互いを認め連携しながら一つの大きなものを創り上げていくことこそが造船の魅力だと語る。

も台風など天候に影響があると、工程管理のことが自然と頭に浮かんできて、色々と考えを巡らせてしまう。そんな休日でも2匹の犬と散歩をすることでリラックス。業界でも高齢化が進みつつあり、世代交代の方法も考えている。島では必要なモノがすぐ間に合わない不便さがあるが、その分のんびり暮らせるところが良いと笑う。

造船の魅力は「造形美」。船の美しさを間近で見てほしい

好きな工具はモンキーレンチ

島の仕事図鑑

2

広島県 大崎上島

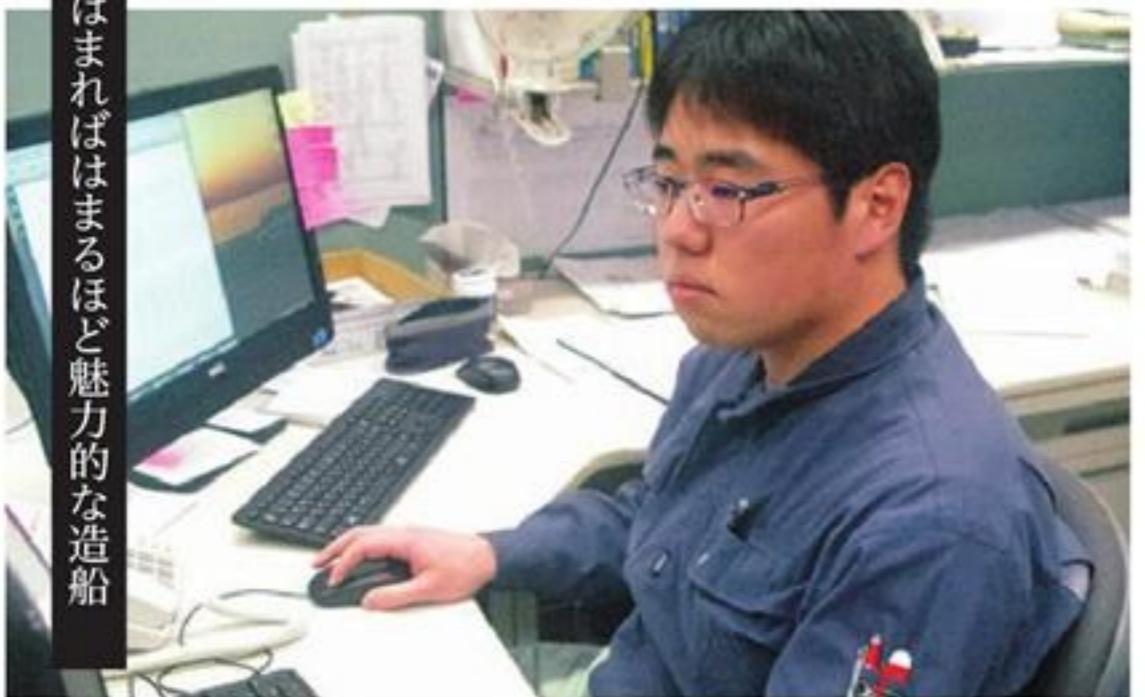
造船

08

佐藤友裕

ONでもOFFでも 船のことが頭から離れない

「点を打つことで曲線が描ける、船の曲線を描くことが一番面白い」と語る友裕さん。担当する仕事は船殻設計。大学では海洋機械工学を学んだ。とにかく大きな乗り物が好きで、海上保安庁の航海訓練に参加したことが、この仕事に携わる決め手になったという。休日は、模型づくりをしたりするが、気がつけば船の形を妄想していたりするほどの船好き。曲線で構成される船のプロペラや、複雑な曲線が多い船が魅力的だと言う。好きなことが仕事に繋がっていると、その顔は熱意に溢れている。造船のあらゆるところに楽しみを見いだす友裕さん。夜のライトで浮かび上がった船のシルエットを眺めるのも船を楽しむオススメの方法だと教えてくれた。



はまればはまるほど魅力的な造船

海運 09

日浦徹治

島と本土を繋ぐフェリーは 快適なコミュニティ



島民の足であるフェリーの運航管理を行う徹治さんは、根っからの船好きで、家業のこの仕事を継いだ。仕事で最も大切なことは「安全第一」で船を運航させること。そのため、船の設備確認や船員さんとのコミュニケーションを日々大切にしている。島と本土をつなぐ旅客船はサービス業にも近いと話す。運輸業でありながら、港を離れると船内は一つの社会空間を形成している。ご近所さんと乗り合わせたり、久しぶりに会う人もいたりする。船内では独特の空間が生まれると言う。快適な時間を過ごせる場所を提供する、そこに仕事のやりがいを感じている。徹治さんは船の魅力をこう語る。自転車より少し早いぐらいのスピードで進む「ゆったり感」。船の旅を楽しんでください。



海運 10

菊田 隆之

海の石油屋さん

燃料は船の命綱

瀬戸内海を航行する多くの船。海上の船から船へ給油する石油屋は、造船や海運にとって欠かせない存在。造船所でつくられた船、貨物船、旅客船、タンカーなど、給油する船の種類は多様である。隆之さんの仕事は、給油の際に船を留めるための綱とり、給油のためのホース繋ぎ。船を固定するために桟橋や相手の船にロープを結ぶ。給油の時に船を固定する大切な仕事。綱を結ぶタイミングや締め具合がとても大切だと言う。判断を間違えると船をぶつけたり、破損せたりしてしまう。そのタイミングは極めて難しく熟練を要する。丁寧に作業することを心がける、それがこの仕事の秘訣と隆之さんは言う。船の業界は上下関係が厳しいイメージを持つ人も多いが、先輩は優しく会社の雰囲気はとても明るく働きやすい。隆之さんのやわらかい笑顔がそれを物語っていた。



船から見る日の出はとにかく「楽しい!」の一言

海運業界の魅力はとにかく「楽しい!」の一言



造船 11

米今順威

島に帰るために

自動車の設計から船の設計へ



499tの貨物船設計に携わる

休日はバイクレースとサーキット巡り

若手を見守る匠

takumi

藤井勇士

島へUターンし、造船所で働き始めたのは約50年前。資材業務を担当し、営業から注文まで何でもこなす。主にエンジンや鉄の材料注文を行い、時には現場に出ることもある。進水式や船の引き渡しが間近になると多忙を極める。それでも完成した船を引き渡す時の喜びは、何事にも代え難い充実感があると言う。それは、他の仕事に就くことは考えられないとい

自分が思い描いたものが形になる、それがこの仕事をのやりがいと語る順威さん。船の中の構造全般の設計を担当する。図面でパイプの機関部、キッチンや居住スペースなどを描く。図面は平面だが、三次元で立体的に考えて設計することが求められるのがこの仕事。こだわりは「線はまっすぐ描くこと」。基本的なことだが一つ一つの線をはっきりと丁寧に仕上げることが良い船づくりに繋がる。現場の工員さんとパイプの通りの話をしたりすることは欠かせない。常に新しい現場の仕事を覚えていくことで設計する力をつけている。順威さんに船を見るとときのオススメの角度を教えてもらった。右斜め前から船全体のフォルムを見るのが、最も船が格好良く見えると語る。



若手を見守る匠

takumi

藤井勇士

休日はバイクレースとサーキット巡り

499tの貨物船設計に携わる

語るほど。造船はそれほど魅力に溢れているのだ。休日は趣味の農作業。みかん畑に職場にいる海外の人たちを連れて行き、島らしい農業体験の機会もつくっている。仕事だけではなく、普段から面倒見がよい勇士さんは頼れる上司。温かい眼差しが印象的だった。

お気に入りの道具は切断機とハンマー



年間3~4隻の新造船

「死ぬまで造船所で働く」と言い切る和也さんが、造船の仕事に就いたきっかけは「なんで鉄の塊が浮くのか知りたかった」からだと笑いながら語る。仕事は、船の底のパーツ（ブロック）をつくること。仕事の仕方と高い技術力は、先輩の姿を見て覚え、自分がやつてみて、わからないことは聞くということを繰り返して身につけたという。作業の中では、鉄を溶接したり、切断したりしている時が一番楽しい時間。先輩たちはとても優しく、落ち着いて仕事ができる今の環境がとても働きやすいと言う。ここでは、昔ながらの伝統的なやり方で進水式を執り行う。それがとても気に入っている。大きな船を滑らせ、海に降ろす姿はいつも感動する。そんな造船業界の魅力を一言で表すと「造形美」とものづくりの良さを語った。

高い技術力は見て覚える 先輩の姿が教科書



造船 12

中秋和也

島の仕事図鑑

2

広島県 大崎上島

造船一筋、この道50年の匠

どんな苦労も、船の引き渡しの時に吹き飛んでしまう

造船 13 宮本誠治

ものづくりが好き

艦用品づくりが巨大な船を形づくる



Made in Japan!自分でつくりた製品が船になる
お気に入りの工具は長さを計るスケール



若手を見守る匠 takumi

惣明武志

船の骨組み、艦用品、船の部品である煙突や階段などをつくる匠。大切なのはチームワーク。どんな条件であっても、知恵を出し合い、精度の高い製品を自分たちで全てつくるという強い意志を持っている。そのためには高い技術とお互いの信頼関係が欠かせない。社員とは趣味の釣りを通じての交流も大事にしている。しないことも楽しいことも分かち合えるからこそ良い仕事ができる。海外との競争も熾烈を極めるが、

造船業界を支えるため目指すチームワークは日本一

まずはこのチームで日本一を目指す。

ものづくりが好きで土木関係に携わっていたが、製作所の社長が島の先輩だったことから、誠治さんは造船業界に飛び込んだ。ここでつくりたものが大きな船を形づくる一部になつているのが魅力的だと言う。誠治さんは、船に必要な階段や煙突などの艦用品をつくっている。船は海に浮かんだだけでは何もならない。あらゆる装置や設備などの艦用品が整つて、初めて船としての機能を発揮する。細部までこだわった部品を一つ一つ丁寧に仕上げる。品質の高さでお客様の要望に応える仕事だと語る。職場には年齢が近い若手が多いのでとても明るい。仕事に取り組む姿勢は楽しげで持ち前の明るさが溢れ出ていた。

造船の島の アイデイアソン

造船業界の魅力

2015年10月16日～18日大崎上島町商工会が「造船の島のアイデイアソン 造船業界の魅力」を開催。広島県立大崎海星高等学校や広島商船高等専門学校の学生、東京をはじめ各地から大学生が集まつた。初日は大崎上島の魅力を知る「大崎上島にある6つの日本二を見学。2日目は大崎上島の造船会社を見学しディスカッション。最終日は、造船業界の魅力を探り、それを誰にどう伝えるかというアイデイアをチームで発表した。

このアイデイアソンでは、大崎上島を学び、その地に根付く造船とその業界のことを学び、大崎上島の造船の魅力を伝えるためのアイデイアを様々な視点から考案した。業界で働く職人、造船男子のかっこよさを詰め込んだ「月刊造船萌え」を発刊するアイデイア、島内まるごとテーマパーク計画、船の町プランディングなど、若い世代によるユニークなアイデイアが次々と発表された。造船には高度な技術が多く、また現場はとてもダイナミック。現場にいると慣れてしまう風景でも、それ自体が一つの魅力もある。普段はライバル同士の造船会社が日程を合わせ、同日に工場見学を行い、ディスカッションでは、なかなか顔を合わすことのない経営陣同士が参加し審査を協同で行うなど、造船の未来に向けて多くの業界連携を試みた。

競争だけではなく協同で未来を切り拓くために造船業界を盛り上げる。「造船の魅力」が伝わっていくことで造船業界全体に新しいアイデイアが生まれ続ける。大崎上島独特的の仕事として造船業界の更なる発展に期待が膨らむ。



櫂、造船と 櫂伝馬

かいでんま



木造船の町として輝かしく栄えた大崎上島。祭りで使われる櫂伝馬という木造船は、より速く進むようにつくられ、そして競漕で優勝することは島の船大工にとつて何よりの誇りであった。同時に、大崎上島の男同士、地区上の諍いも多い。そんな櫂伝馬競漕も島を襲う少子高齢化の波で存続が危ぶまれるようになった。祭りで若き船頭たちが肩を並べることはないが、お互いが声を掛け合いながらここに集まり、彼らにとつて櫂伝馬とは何かを一言で語つてもらつた。今、島の若者達は地区の垣根を超えて、肩を組み合へ大崎上島の大好きな「宝の舟」を守らうとしている。



人生
天満
地区
藤原啓志

輪
地区
浜田慎太郎

仲間
一貫目
地区
佐々木悠

大好き
地区
岩白
岡本龍二

伝統
地区
白水
谷口潤一

命がけ
地区
盛谷
松本和久

繫がり
地区
古江
松葉啓平

誇り
地区
垂水
菅原修一